

D-4 児童の生活構造の時代的変遷に関する総合的研究(その4)家庭における幼児のしつけについて  
大塚女大家政 〇千羽喜代子 飯田朝子 鈴木真一

(その1)に示した19の負向項目の中から、生活習慣・あそび・金銭・手伝いなどしつけに関する項目から、現在の都会の幼児の家庭におけるしつけの特徴について、以下のようにまとめることができた。

1)家庭における教育環境:食事時の態度・テレビの視聴・起床および就寝時・手伝い・こがかい・稽古事などから、親の教育的配慮が拂われてゐることを知る。しかし生活習慣上の自立のできていないもの3%,要求の統制のできていない子どもが5%ある。さらに、前者の半数は要求の統制もとれていない。こゝに親の養育態度に問題のあるものが7%程度存在するのではないかと推定する。

2)親子の接触:子どもに対して親がどの程度に会話をしてゐるかといふことの意識において、大部分の母親は子どもと普通あるいは十分に接触してゐると思つてゐる。一方、父親においては56%である。この意識は朝夕の食事時にみける実態について同様の傾向を認めることができる。しかし、子どもとの接触が少いと意識してゐる父親が、朝夕の食事および家族全員のレジャーにおいて、必ずしも接触が少いとはいへず、ここに接触の質的・量的検討および綿密な親の意識を調査する必要があると考へる。

全体のまとめ:東京都内の新中間層の一部の幼児を対象とし、現今の幼児の生活構造の実態を把握することができたが、次回には過疎地域における実態を調査し、両地域間の特徴を明らかにする予定である。